

近世の尼崎の歴史は？

近世（きんせい）は、江戸時代の期間を指します。尼崎市立地域研究史料館の「図説尼崎の歴史」には年表で次のようにまとめられています。商都大阪に隣接する尼崎は、約300年も続いた徳川幕府の安定によって、ますます発展しました。



1603 (慶長8)	2・12 徳川家康、征夷大將軍となる。
1617 (元和3)	この年、戸田氏鉄が尼崎藩5万石の大名となり、幕府より中世尼崎城に替わる新たな城の築城を命じられる。築城とともに、城下町建設も始まった。
1635 (寛永12)	7・28 戸田氏鉄が美濃国大垣へ所替えを命じられ、替わって青山幸成が遠江国掛川より尼崎へ所替えとなった。
1640 (寛永17)	この年、国学者・契沖が尼崎藩士下川元全の子として尼崎城下に生まれた。
1643 (寛永20)	6・6 尼崎藩が朝鮮通信使を兵庫津で接待した（記録されている、最初の尼崎藩による通信使接待）。
1653 (承応2)	5・15 大坂玉造の鍵屋九郎兵衛らが葭島の太布脇開発を尼崎藩に出願（のちの道意新田）。この頃から海岸部の新田開発が盛んに行なわれる。
1664 (寛文4)	この年、尼崎城の南に建設中であった築地町が完成した。
1688～ 1703 (元禄年間)	この頃、中在家町戎の浜の魚市場には、京都辺りに魚を運ぶ者も含めて約千人の魚商人が出入りしたと言われる。
1705 (宝永2)	5・京都など畿内から伊勢に集団で参宮するおかげ参りが流行。大坂、尼崎、西宮、兵庫などからも人々が参宮。
1711 (宝永8)	2・11 青山幸侶が信濃国飯山への所替えを命じられ、替わって松平忠喬が遠江国掛川より4万石の大名として尼崎へ所替えとなった。
1716 (享保元)	9・近松門左衛門が久々知広濟寺開山講中に加わる。 この頃、尼崎城下の町人人口は1万6,439人、家数は1,641軒であったと記録されている。

近世	1726 (享保11)	7・19 尼崎藩は、幕府より武庫川普請および、有馬郡・武庫郡・川辺郡の山々の普請を担当する土砂留大名を命じられた。
	1729 (享保14)	4・19 中国商人から将軍に献上される象を連れた一行が、尼崎城下にほど近い別所村に宿泊した。
	1732 (享保17)	この年、享保の大飢饉。尼崎藩領においても稲に虫が付く被害が発生し、収穫量が例年より大幅に減少した。
	1738 (元文3)	7・1 次屋村・浜村・水堂村など、旗本青山幸草知行所の農民が、御用銀などの強引な徴収に抗議して妻子ともども村から逃散した。
	1764 (明和元)	10・20 浜田・西難波両村民が浜田川の水利をめぐって騒動を起こし、浜田の村役人が牢死する結果となった。
	1769 (明和6)	2・13 幕府は尼崎藩領のうち西宮町・兵庫津・灘目などを直領とし、播磨国内に替え地を与えると申し渡した。
	1781 (天明元)	7・4 武庫川原で尼崎藩の砲術訓練が行なわれ、鉄砲と花火の見物に14,5万人の人々が集まった。
	1797 (寛政9)	10・27 武庫・川辺・豊島3郡の村々は、綿・菜種販売の自由と在々絞り油屋の油小売解禁を求めて、大坂町奉行所に訴え出た。
	1805 (文化2)	10・2 幕府測量方伊能忠敬一行が、神崎村から測量を開始し尼崎城下に入った。文化5年にも神崎から伊丹町にかけて測量した。
	1826 (文政9)	ドイツ人医学者・シーボルトがオランダ商館長の江戸参府に随行し、2月と5月に陸路尼崎を通過した。
	1828 (文政11)	9・3 尼崎藩は向こう3年間、家中の俸禄を大幅に削減する「上げ米」を命じた。この後も藩財政改革に取り組むが、財政窮迫が続く。 10・ 幕府は播磨国の尼崎藩領の一部を直領とし、替え地を摂津国内に与えると申し渡した。
	1831 (天保2)	6・前年来、畿内近国各所でおかげ踊りが流行。尼崎城下や現尼崎市域の村々でも、おかげ踊りが発生した。
	1837 (天保8)	2・19 大塩平八郎の乱。尼崎藩は城下の警護を固め、さらに藩士を大坂守衛に派遣した。
	1854 (嘉永7)	9・18 プチャーチン率いるロシア軍艦が尼崎沖に停泊し、月末まで湾口・沿岸を測量調査した。これを契機に大阪湾の海防という問題が浮上した。
	1864 (元治元)	7・20 禁門の変で敗走した長州藩の山本文之助が尼崎で捕まり自決。翌年から民衆が墓に参詣（残念さん信仰）。
	1867 (慶応3)	10・14 将軍徳川慶喜が朝廷に大政奉還を申し出た。